

もう一人の助け主の約束

ヨハネ福音書14:12-17

【新改訳 2017】

14:12 まことに、まことに、あなたがたに言います。わたしを信じる者は、わたしが行うわざを行い、さらに大きなわざを行います。わたしが父のもとに行くからです。

14:13 またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは、何でもそれをしてあげます。父が子によって栄光をお受けになるためです。

14:14 あなたがたが、わたしの名によって何かをわたしに求めるなら、わたしがそれをしてあげます。

14:15 もしわたしを愛しているなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。

14:16 そしてわたしが父にお願いすると、父はもう一人の助け主をお与えくださり、その助け主がいつまでも、あなたがたとともにいるようにしてください。

14:17 この方は真理の御霊です。世はこの方を見ることも知ることもないので、受け入れることができません。あなたがたは、この方を知っています。この方はあなたがたとともにおられ、また、あなたがたのうちにおられるようになるのです。

【祈りながら考えよう】

- (1) クリスマス（キリスト降誕）と「神の救いの三段階」との関係の説明して下さい。
- (2) 「イエスの名によって求める」とはどういう意味ですか。
- (3) 聖霊はなぜ「真理の御霊」と呼ばれるのですか。

【解 説】

(1) 神の救いの段階

アダムにあって罪人となり墮落した人類を救われる神の救いの道は、次の段階で啓示されている。

①受肉：「ことば（キリスト）は人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た」（ヨハネ1:14）。永遠の初めから父なる神とともにおられた神の御子が受肉（人となる）された。キリスト降誕である。

バプテスマのヨハネはイエス・キリストを紹介して言った。「見よ、世の罪を取り除く神の子羊」（ヨハネ1:29）。

②十字架：イエス・キリストは父なる神から、私たちの罪を身代わりに背負わされ、その罪のためにさばかれた。こうして、神の御子キリストが身代わりにさばきを受けてくださったことによって、私たちが支払わなければならない罪の代価が身代わりに支払われ、罪の償いが完全に果たされた（ヘブル9:12）。

③復活：十字架での死後、三日目に死人の中からよみがえられた（Iコリント15:4-8）。復活の意味は、キリストが律法の要求をすべて満たしたことを父なる神が宣言された証拠である。その復活は信仰者の復活を予表し保証するものであり、信仰者はやがてキリストのからだのように栄光の姿へと変えられる希望を与えられている。

④昇天：復活したキリストは、ご自身が復活したことを、弟子たちに現れて示された後、昇天され、天の至聖所に入られ、父なる神の右に着座された（ヘブル6:20）。私たちの大祭司として父なる神にとりなしておられる。

⑤聖霊降臨：昇天された主は、「もう一人の助け主」（ヨハネ14:16）として聖霊が与えられるように父にお願いし、聖霊降臨が実現した（使徒2:1-2）。弟子たちとともに生きたイエスの身体的臨在の代りに、弟子たちに伴い、力付け、神の国の証しを権威付けることになる。

(2) すばらしい三つの約束を与える

主イエス・キリストの地上生活の最後が近づいて来て、主が「わたしが行くところに、あなたは今はついて来ることができません」（14:36）と弟子たちに語られると、弟子たちは動揺し始めた。主が自分たちから離れて、どこかへ行ってしまふのだと分かったからである。そういう弟子たちに対して、主は、必ずあなたがたを天の父なる神のもとに連れて行き、そこで一緒にいるようになるのだと言われて、ご自身が神であること、そして道であり、真理であり、いのちであることを語られた。その後で、「三つのすばらしい約束」を与えられた。

①第1の約束（さらに大きなわざを行う）

「まことに、まことに、あなたがたに言います。わたしを信じる者は、わたしが行うわざを行い、さらに大きなわざを行います。わたしが父のもとに行くからです。（12節）」

第一の約束は、主を信じる者が、主イエス・キリストが行うわざを行うということである。それは、主がなさった奇蹟のみわざをすることができること。

しかし、ここで奇蹟と言っているのは、病気がいやされたり、悪霊が追い出されることだけを言っているのではない。神に背を向けていた私たちが、神を信じるようになったことも奇蹟である。大きな問題にぶつかって、ほとんどの人がその中で立ち上がることができないほど打ちのめされている時、立ち上がる力を持って、「私たちは四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方に暮れますが、行き詰まることはありません。」（IIコリント4:8-9）とすることができることも、また奇蹟である。主を信じる者がする主のわざとは、実にこのことである。

しかし、主は「さらに大きなわざを行います」と言われた。これは何を指しているのか。

これは、伝道の実のことである。確かに、ペテロはペンテコステの日の説教で、一度に三千人もの人を回心させた（使徒2:41）。また多くの祭司たちが次々と信仰に入った（使徒6:7）。この点においては、主がなさったわざよりも大きなわざを行っている。それだけでなく、今日世界中に福音が宣べ伝えられていて、多くの人々が主を信じるようになってのもまた、主のこの約束の成就にほかならない。

そして、主は、この約束が成就する理由として、「わたしが父のもとに行くからです」と言われた。主が父なる神のみもとに行かれると、聖霊を遣わして、彼らに「それをする力」を与えてくださるからである。

②第2の約束（祈りの力）

「またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは、何でもそれをしてあげます。父が子によって栄光をお受けになるためです。あなたがたが、わたしの名によって何かをわたしに求めるなら、わたしがそれをしてあげます。」（13-14節）

これは、祈りの力である。しかし、この約束をよく見ると、主は、主の名によって私たちが求める時、「わたしは…それをしてあげます」と言っておられる。父なる神に対する祈りではなく、イエス・キリストに対する祈りを教えておられ、イエス・キリストがその祈りに答えて下さるという約束である。

私たちは、祈りというものは、父なる神に対して、イエス・キリストのお名前によってささげるものだと考えているかもしれない。それが間違いなのではない。主も、「主の祈り」において、「天にいます私たちの父よ」（マタイ6:9）と祈りなさいと教えておられる。しかし、ここでは、主はご自分に対して祈り求めるようにと言っておられる。このことは、決して矛盾するものではない。私たちは父と子と聖霊の三位一体の神に祈るのである。だから、祈りの中で、天の父が、イエス様になろうが、聖霊様になろうが一向に構わないのである。

それでは、主が「わたしの名によって求めることは、何でもそれをしてあげます」とは、どういうことなのか。主イエスの御名によって求めるためには、イエスと親しい交わりの中に生きなければならない。そうでなければ主がどのような態度を取られるか、分かりようがない。主との距離が近ければ近いほど、私たちの願いが主の願いと同じものになっていく。

「父が子によって栄光をお受けになる」のは、神の目に喜ばれることだけを御子が願うからである。このような祈りがささげられ、受け入れられる時、大きな栄光が神に帰されることになる。

この約束が繰り返されているのは、強調のため、神の民が強い励ましを受けるためである。主のみこころの中心に生き、主との交わりを保ちながら歩み、主が望まれることは「何でも」求めなさい。そうすれば祈りは聞かれる。

③第3の約束（真理の御霊が与えられる）

「もしわたしを愛しているなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。そしてわたしが父にお願いすると、父はもう一人の助け主をお与えくださり、その助け主がいつまでも、あなたがたとともにいるようにしてくださいませ。この方は真理の御霊です。世はこの方を見ることも知ることもないので、受け入れることができません。あなたがたは、この方を知っています。この方はあなたがたとともにおられ、また、あなたがたのうちにおられるようになるのです。（15-17節）」

主がこの世を去って行かれる時、主はご自身とは別の「助け主」（キ）パラクレートス παράκλητος）「呼んだらすぐに助けに来てくれる方」を意味する助け主を送って下さるというのである。その助け主は、「真理の御霊」である。

イエス・キリストも「助け主」であった。しかし、聖霊の「助け主」は、主イエス・キリストの場合とは違う。地上を歩まれた主イエス・キリストの場合は、今ここにおられれば、ほかの所に行くことはできない。しかし、聖霊は、いつ、どこにでもおられて、助けを必要としている信者を助けて下さる。

しかし、主はここでこの3番目の約束を与えられるに先立って、こう言っておられることに留意したい。

「もしわたしを愛しているなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。」このことは、何を意味しているのか。

主が弟子たちから離れて行くことで、弟子たちが心を騒がせたり、泣き悲しんだりするのではなく、主を本当に愛していることを、主の御言葉を守ろうと努めることで表しなさいと主は語られたわけである。

主のために一生懸命になるならば、「人間の力では到底守れない」御言葉を守り、「助け主である聖霊が出来るようにして下さる」というのである。真理の御霊であられる聖霊の神は、真理である御言葉を解き明かし、真理それ自体であられるキリストをよく知ることができるようにして下さる。何と感謝なことであろう。